

紅葉會詠草：文苑

著者	山の人，俊左久，ゆふ月，筑水，紫陽
雑誌名	龍南會雑誌
巻	9 2
ページ	3 8 - 3 9
発行年	1902-05-31
その他の言語のタイトル	紅葉会詠草：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5338

桃をりて君がみ髪にかざしめんふさはぐいかに春うつくしき

三十八

紅葉會詠草

○

山の 人

わた殿にさぐめく人の影消えて花はの白う月かたふきぬ
峠より見下す里の春祭杉の森ぞし旗ひるかへる
髭白き禰宜にあひけり逍遙の社の梅に雨はれし朝
松三里今朝遠乗の濱つたひ霞うすれて白帆たゝよふ
花ふかき樓の東に笛きゐてあどは静けき薄月夜かな
ながき日を軒の鸚鵡に戯るゝ妹の袂に花ちりかゝる
花賣の少女に今朝もゆき逢ぬ葉桃かけさす小川のほとり

○

俊 左 久

藤によれる能樂殿の夜の雨鼓わびしくともしゆらぐよ
恨みわび桃の蕾を白壁ににじり書くかな人を呪ひの歌
洗髪に春風ゆらぐおばしやや櫻ひら／＼日は今年なり
麥笛をふきつゝ歸る里の路家の灯見ゆる菜の花月夜
箒やめで鐘のゆかりを説く御僧落つる椿に又ふりかへる
金屏に歌會の燈ゆらきそめて院の春雨軒端にふけぬ

眺めてわれもひにふける夕空に流る、雲の行方しらすも
 よの戀にやぶれしをどこ春山の十歩の畑に麥の草とる
 默念の僧見かへりぬ床の間に鉢の牡丹の花はくづれて
 中庭の青葉かくれに梅の實の數見ゆるめぬ春ゆくらしも

○

乗りすてゝ宮居の内へ人はいにぬ駒なる鞍に白き桃散る
 日毎來て文字かきならふ丸窓に葉柳しげり晝の雨ふる
 山に住む友おどづれて長き日を茶の畑廻り茶の芽摘けり
 わび住みの日ゝ歌思ふ窓の外に赤くなりけり鬼火一つ
 何となくたんば廻て野雲雀の巢を見出けり豆の葉隠れ

折にふれてよめる

うちわたす河邊の里の朝けぶり残ると見しは柳なりけり
 雨はれしなこりの露もなつかしく匂ひこぼるゝ花の色哉
 雨霽て色ます野へのつは菫摘みてもゆかん露にぬるとも
 箱崎のうらのまつ風こゑたれて霞に沈むあまの釣舟
 春の野はすゝなすゝしろ咲満て花の錦となりけるかな

筑

水

紫

陽